

海外の朝鮮資料事情について 2

板垣竜太 同志社大学教授(博士)

『社協京都会報』前号(第19号)で、私はモスクワ、延辺、ワシントンDCの朝鮮資料事情について報告した。その後、今年(2018年)の8月末から9月初にかけて、ロシアのサンクトペテルブルクに短期滞在する機会を得て、不十分ではあったが資料調査をすることができた。また、モスクワの旧レーニン図書館を4年ぶりに訪問したところ、昨年本誌で紹介した資料事情から多少の変化があった。そこで前号に続き、サンクトペテルブルクの朝鮮資料事情をまとめるとともに、モスクワの変化について補足したい。

1. サンクトペテルブルク

サンクトペテルブルクは、かのピョートル大帝がスウェーデンと覇権を争った大北方戦争中の1703年から築きはじめた人工都市で、1713年の遷都からロシア革命の1917年まで約200年にわたって帝政ロシアの首都だった。歴史の流れのなかで、その名もペトログラード(1914-24)、レニングラード(1924-91)、サンクトペテルブルクと変遷をとげた。ロシア最古の大学であるサンクトペテルブルク大学も科学アカデミーも、いずれもピョートル大帝末期にこの地で創立されたものだ。その意味でサンクトペテルブルクは学問-文化の中心都市であり、今日も住民たちは「文化首都」と誇らしげに語る。だからこそ文献調査もモスクワだけにとどめてはいけない。

サンクトペテルブルクまでは、日本からの直行便はないが、ヘルシンキやアムステルダムなどを經由した便はある。プルコヴォ空港は、市内から15キロほど南に離れたところにあり、地下鉄2号線モスコフスカヤ駅行きバス39A(直行)または39に乗るのがよい。あるいはモスクワからアクセスするなら、高速鉄道サブサンに乗るのがお勧めだ。乗り心地はすこぶる良く、少しお金を出してアップグレードすればおいしいご飯も出てくるし(それでも飛行機の移動よりずっと安い)、電源もあってWi-Fiも使える。3時間40分かかるが、あまり長さは気にならないし、何よりサンクトペテルブルク市内中心部に到着するので、飛行機より便利だと思う。

今回は朝鮮資料を所蔵する機関3ヶ所に行った。といっても資料をまともに見られたのは、そのうちロシア国立図書館だけだ。モスクワ以上にハードルが高いため、公共図書館以外はいきなり行ってもなかなか資料は見られないと思っておいた方がよい。大学図書館などの場合は、誰かの紹介が必要となる。

1)ロシア国立図書館(Rossiyskaya Natsional'naya Biblioteka)

モスクワにある旧レーニン図書館の名称(Rossiyskaya Gosudarstvennaya Biblioteka=ロシア国家図書館)に似ているが、ペテルブルクの方が由緒正しい。モスクワの図書館が1862年創設だったのに対し、ペテルブルクの方はエカチェリーナ2世時代の1795年に遡る。帝国公共図書館は20年かけて、本館は、地下鉄2号線Gostiny Dvor駅、東側出口のすぐそばにある。ゴスチーヌィ・ドゥヴォールは18世紀につくられた百貨店で、今でも黄色い壁の巨大な2階建ての建物に小さな店がたくさん入っている。図書館はネフスキー大通り側ではなく、東側(公園側)から入る。

まず入ってすぐの場所に設けられているスペースで入館証をつくる必要がある。旧レーニン図書館もそうだったが、入館証をつくるにはパスポートのほかに、何と高等教育機関の卒業証明書を要求さ

れる（「無学ノ者ハ入ルベカラズ」というところか）。あらかじめ知っていたから持参してきていたものの、知らなかったら入れなかったのだろうか。フォームに記入し、書類チェックを受け、個室で写真を撮られると、間もなくカードが作られる。外国人入館者のカード有効期限はビザの有効期限に合わせてあるので、次来たときにはまた同じ手続きを踏まなければならないということか…。

荷物と上着をクロークに預け（本を持ち込むことはできない）、カードで入館し、閲覧カードを受け取ったらようやく中に入れる。閲覧してもしなくても、最終的にこのカードに職員のサインをもらわないと外に出られない（出口のカウンターには怖い顔をしたお兄さんがいて、最後にチェックを受ける）。本館は最初展示室のような廊下があり、それを抜け、階段を2階に昇ると、本棚のたくさんある美しいリファレンス・ルームに入る。建物全体が美しい博物館のようだが、逆にいえば、図書館としてはあまり機能的とはいえない。それに、そもそも朝鮮語・日本語などのアジア・アフリカ資料は新館に移行中なので、ここでは相談するぐらいのことしかできない。加えて、職員によって専門性や親切さに違いがあり、どの人に聞いても同じ結果が得られるということはずまない。新館でもカードが作れるので、今後は本館に全く用事がなくなるかもしれない。

新館は地下鉄2号線 Park Pobedy 駅を出て、モスクワ通をはさんで目の前にあり、巨大な建物なのでまず迷うことはない。新館でも、入って左側のスペースで入館証を作成することができる。また入って右側の階段を降りたところに巨大なクロークスペースがある（入館者がそれほど多いとは思えないが…）。入館証で中に入るときに閲覧カードをもらう形式は旧館と同じだ。なお、入場したあと、右側に階段を降りると食堂があって、手作り料理が安く食べられる。また、館内で無料 Wi-Fi も飛んでいるので、ここで1日過ごすこともできそうだ。

アジア・アフリカ文献部門（OLSAA; Otdel Literaturny Stran Azii i Afriki）は、1952年に独立した部門で当初は外国東洋部門という名称だったが、のちに今の名称となった。OLSAAは2016年暮れより旧館から新館に移転作業中だが、まだ完了していない。私が訪問した翌週にならないと正式開館しないということで、手ぶらで帰ることになるかもしれないと思ったが、幸運にもまず日本語担当司書、あとから朝鮮語担当司書と会うことができ、親切にも便宜を図ってもらうことができた。といっても、新聞などは倉庫からまだ出せる状態になく、使えるようになるまで、まだ半年ぐらいかかるとのこと。どうも「下」の事情も知らずに「上」から計画が降ってくるらしく、しっかり準備ができてもないのに引っ越しが五月雨式に進んでいる模様。職員が先に引っ越すも、6人が小さな部屋に詰め込まれ、パソコンも共用のものだけだとか、言語別になっていた書籍が移転過程で混ぜられてしまい、また分離する作業が必要だとか…。所蔵資料の電子化も進んでいない。というか、かつて朝鮮語でヒットした書籍が、なぜか今は電子目録で出てこないという現象もあり、謎が多い。

そうしたなかで、明らかにまだ公開できる状態になっていない部屋に担当司書が通してくれて、そこにあるカード目録を使わせてくれたのは非常にありがたかった。カード目録は、単行本（タイトル別／分類別）、雑誌（ロシア発行／朝鮮発行）、新聞（ロシア発行／朝鮮発行）に分けられて作成されている。OLSAA 所蔵の資料が全て入っているので、朝鮮関係の資料といっても、朝鮮語の文献だけではなく、ロシア語等で書かれたものも含まれていた点が特徴的だった。

OLSAAの朝鮮資料はモスクワの旧レーニン図書館には及ばないが、同じように1950-60年代を中心として、かなり揃っている。韓国の北韓資料センターで持っている『労働新聞』のマイクロフィルムの一部は、ここから複製したものだ。旧レーニン図書館の方は、マイクロフィルム化された資料の原本がだんだん見られなくなりつつあることから、原本を見たいときには当面こちらに来た方がよいかもしれないと思う。旧レーニン図書館では見つけられなかったものもあった。何といても新聞で

目についたのは1956年の各道新聞が揃っていたことで(平南・平北・咸南・咸北・黄南・黄北・両江・慈江; いずれもモスクワでは欠落)、これは比較対照してみる価値があるだろう。単行本でも珍しいものがあつた(これは朝鮮語担当者が特別に見せてくれた)。新聞だけはざっと所蔵状況をメモしておいた。2019年以降の利用に期待したい。

2) サンクトペテルブルク大学 (Sankt-Peterburgskiy Gosudarstvennyy Universitet)

1724年創立のロシア最古の大学だ。朝鮮資料は東洋学部(Vostochnyy Fakultet)の図書館にある。東洋学部は19世紀半ばに史学言語学部から独立して成立した。東洋学部はワシリー島のネヴァ河沿いのメインキャンパスに位置している。ちょうど河をはさんで反対側に巨大なイサク聖堂がある。動物学博物館や民族学・人類学博物館(いわゆるクンストカメラ)の並びにある。道沿いの赤い壁の建物が本部で、その左側の緑っぱい建物が東洋学部だ。本部の学院館は、12棟分が繋がった異様なまでに長い作りになっており、2階のこれまた細長い廊下には歴代の有名教授たち(メンデレーエフ、パブロフなど。言語学者のマルもいた)の肖像画が並んでいる。中庭には「東洋」関連の彫刻などがあるが、日本は奇妙な「芸者」風の彫像で、朝鮮半島はなぜか作家・朴景利の銅像によって代表されていた。権威と宗教のもとに、博物学的なものとおリエントナルなものが並ぶ様子は、帝国ロシアの世界観を濃縮的に表象していた。

さて、このように書いたが、実はこの大学は現在極めて閉鎖的であり、入館証なしには足を踏み入れることもできない。キャンパス内に立ち入れない大学などはじめて見た。一緒に行った同大出身の朴露子(Vladmir Tikhonov)によれば、かつてはこのようなことはなく、これは社会主義崩壊後の現象だという。私がずっと中に入れたのも、コリアン・スタディーズの一行と一緒にだったからだ。したがって東洋学部の図書館が誇る約30万冊の蔵書なるものも外部者はなかなか見られない。カード目録があり、朝鮮資料もそれなりにあることまでは確認したが、今回はツアーの一環で入館しただけなので、詳しいことはよく分からなかった。ちなみに図書館自体は建物に入って、階段を上がってすぐ右側にある。その手前の入口付近には、東洋学部の書店があり、それなりに専門的な書籍が売っていて便利ではあった。しかし、これら全ては閉鎖空間のなかにある。あの朴景利の銅像も外部者が一切入れない中庭にひっそりと建っているだけなのだ。今後調査するにしても、東洋学部の先生の紹介抜きにはできないだろう。

3) ロシア科学アカデミー東洋文献研究所 (Institutu Vostochnykh Rukopisey, RAN)

サンクトペテルブルクはロシア科学アカデミーの発祥の地だが、スターリン時代の1934年にモスクワに本部が移った。この東洋文献研究所はその支部に相当する。位置的には、ネヴァ河沿いのエルミタージュ美術館・冬宮殿の並びにある。建物は19世紀半ばにニコライ1世が子どもたちのために建てた新ミハイル宮殿の一つで、冬宮殿ほどの圧巻ぶりはないにしても、この研究所の外装・内装には目を見張るものがある。特に2階へ上がる階段から閲覧室までは輝いている。申し込みにより館内ツアーもおこなっているようだ。私はサンクトペテルブルク大の一行と一緒にだったので、建物の案内を受けたが、建物よりも中の資料に関心がある者としては途中で飽きてしまった。

図書館は、外部者向けには月・火・水の10~18時に開館しているとのこと。電子目録があるが(http://library.orientalstudies.ru/irbis64r_15/)、どれほど網羅しているかは不明。カード目録があつたので、ざっと見たが、朝鮮現代史に関わる文献はさほど豊かではなかった。どちらかというと前近代の文献に特化している。中国やインドなどについては目を見張るような資料があるが(紀元前後インド

の文字資料や、清のラストエンペラーがロシアのラストエンペラーに送った親書など)、朝鮮に関していえばあまり見るべきものはない。稀覯本を見学させてもらったが、英国外交官 William G. Aston が自ら書き残した朝鮮関連資料が珍しかった程度で、あとはソウルにもあるようなものだったと思う。

資料を見たのは以上だが、現代史的な関心からすれば、国立ロシア政治史博物館 (Gosudarstvennyy muzey politicheskoy istorii Rossii) も興味深かった。帝政ロシア末期からロシア革命を経てソ連時代末期までの経験を展示したものだ。2017年はロシア革命100年だったので、そのときに展示はリニューアルした模様だ。英語での展示説明もあり、ゆっくり見たら半日はかかるほど展示はたくさんあった。

2. モスクワ補遺

4年前のモスクワ訪問時に行った旧レーニン図書館(ロシア国家図書館)の東洋文献センター (Tsentr Vostochnoy Literaturny) を今回再訪した。すると、多少事情が変わっていた。主として便利になったのだが、3点にわたって述べておこう。

まず、何といっても嬉しいのは資料の写真撮影が可となったことだ。以前は職員にお願いして、高いお金を払ってコピーするかスキャンしてもらわなければならなかった。現在の規定では、個人の使用目的で、専門的なカメラ(一眼レフなどが想定されているようだ)ではなく、三脚を使わず、静かに(iPhoneのシャッター音のような爆音は不可)撮影する分には自由になったのだ。これは大量の資料収集をするためには重要な進展だ。

次に、1940~70年代の朝鮮語の単行本はかなりの割合で電子カタログ(<http://aleph.rsl.ru/>)から検索できるようになったことだ。雑誌も相当程度入力されているように見える。ただ、空白によって単語を識別しているためか、分かち書きを正確に入れないと、うまく検索できないこともあるようだ。どれぐらい網羅的かは分からないし、まだヒットしないものもあるが、それでも便利になったことは間違いない。

最後に、図書館そのものの変化ではないが、東洋文献センターのすぐそばにホテルができていた。Veliy Hotel (Mokhovaya street, 10, building 1)だ。今回知らなかったのも、別のところに予約したが、アクセスからしても値段からしても検討に値すると思う。

なお、前回お世話になった高麗人3世の司書は、今回もお目にかかれたが、年齢もあるのでそろそろ退職しようかとおっしゃっていた。英語ができる職員もいるから私がいなくても大丈夫と語っていたが、朝鮮語ライブラリアンは存続してほしいものだ。



2回にわたって海外朝鮮資料事情をまとめたが、本心を言えば、朝鮮資料は朝鮮民主主義人民共和国の機関を直接訪問して閲覧してみたい。2018年は朝鮮半島情勢をめぐる一つの大きな画期となった。今後、朝鮮資料を本国で自由に見ることができるようになるかどうかは、板門店宣言にうたわれた「平和と繁榮」がどれだけ実現できるかにかかっている。その日が来ることを待ち望みながら、こつこつと資料を集めていきたいと思っている。

※実際に訪問しようという方は、連絡 (ritagaki@mail.doshisha.ac.jp) をくだされば、さらに詳しい情報をお伝えします。

所在地・ウェブサイト案内

サンクトペテルブルク

ロシア国立図書館 (Rossiyskaya Natsional'naya Biblioteka)

ウェブサイト <http://nlr.ru/>

本館 Ploshchad Ostrovskogo, 1/3 最寄駅 Gostiny Dvor (2号線)

新館 Moscow Ave, 165, building. 2 最寄駅 Park Pobedy (2号線)

サンクトペテルブルク大学 (Sankt-Peterburgskiy Gosudarstvennyy Universitet)

東洋学部 (Vostochnyy Fakul'tet)

ウェブサイト <http://www.orient.spbu.ru/en/>

住所 Universitetskaya naberezhnaya, 11

ロシア科学アカデミー東洋文献研究所 (Institutu Vostochnykh Rukopisey, RAN)

ウェブサイト <http://www.orientalstudies.ru/>

住所 Dvortsovaya naberezhnaya, 18

国立ロシア政治史博物館 (Gosudarstvennyy Muzey Politicheskoy Istorii Rossii)

ウェブサイト <http://www.polithistory.ru/en/>

住所 Kuibysheva St., 2-4

장수산의 현암



발行者 在日本朝鮮京都府社会科学者協會
住所 〒615—0041
京都市右京区西院南高田町 17
電話 075—313—6161
編集 社協京都会報第 20 号編集部
印刷 朝鮮大学校出版部 TEL042-341-1331
発刊日 2018 年 12 月 1 日